

〈特集〉

伊勢系古花に見る花菖蒲の美 —その成立と特徴—

三重県津市 神山 康夫

伊勢系花菖蒲は江戸系と肥後系に並ぶ花菖蒲の3大系統のひとつであるが、現在各地の花菖蒲園で栽培されている江戸系や肥後系に比べて伊勢系品種を目にする機会は少ないのが現状である。伊勢系品種のルーツは江戸時代後期の松坂（現・三重県松阪市）に発しており、その後明治から昭和にかけて多数の品種が育成された（岡村1932、富野1957）。

江戸時代後期から太平洋戦争までの約100年間（およそ1840～1940年）に伊勢地域で育成された花菖蒲の品種群は「伊勢系古花」と呼ばれている（富野1954、田中2000）。この間に作られた伊勢系品種は数百に及ぶと推定されるが、大半の品種が時代の荒波の中で絶えて消滅し、残っている古花品種は60種類程度と思われる。これに対し戦後から現在までに育成された伊勢系花菖蒲は「伊勢系新花」として区分され、銘花と呼ばれる数多くの品種が現在栽培されているが、ここでは伊勢系古花に焦点を当てて紹介する。

江戸系・肥後系との違い

江戸系花菖蒲の始まりは、江戸幕府の大目付役・松平定朝（菖翁）が著した「花菖蒲培養録」（1853）に詳しく書かれている（参照文献：加茂1992）。それによれば「安積沼の花且味」（奥州あさか沼の「はなかつみ」と呼ばれていた花菖蒲の一種）の種子を取り寄せ、その実生集団から大輪で変化のある多数の優良個体が現れた。これらは菖翁花と呼ばれ、その後に育成された花菖蒲品種の基礎となった。

菖翁花を始めとする江戸系古花には様々な花形や花色を示す多様な品種があり、種々の変わりものを取り込む江戸人の粋な気質がそのままに表われている（平尾1973）。花茎は葉より上に抜き出て花がよく目立ち、戸外の花菖蒲園などでの観賞に適する。

一方、肥後系は、江戸から熊本藩に分譲された菖翁花を元にして肥後藩武士の美意識にそって改良育成された品種であり、地元では熊本花菖蒲と呼ばれる（西田1955）。六英咲きの大輪で豪華な花容を示すのが特徴で、鉢仕立てで室内観賞に向く多数の品種が作られた。熊本の満月会では肥後花菖蒲の陳列・鑑賞法も重視され、武士の威儀に満ちた風情が漂うと言われている（村山1974）。

伊勢系古花は、伊勢地方独特的文化的風土と美的感覚を反映して、和室で座って観賞できるような花として作られた。草丈は高すぎず、花容は控えめで清楚な感じがあり、侘び寂びに似る趣きがある。江戸系や肥後系に比べて、伊勢系は全体的に見て柔軟な風情があり、穏やかで女性的な美しさが漂うと言われてきた。その反面、肥後系に見られるような豪華さや強健性は薄いので、広大な花菖蒲園では育て難く目立たない存在の要因もある。

“花もいろいろ、人もいろいろ”、花の好みや美的関心は人により様々で多様性の有ることが園芸文化を豊かなものにする。ジャーマンアイリスに見られるような大きくて豪華な花が見栄えが良く美しいと称賛される一方、山形県の長井古種のように華美な装飾を省いた簡素な美しさも見直されている。飾り気も控えめな美しさとは何か、その実例として伊勢系古花を再評価したい。

伊勢系古花の歴史

伊勢系古花は松阪花菖蒲とも呼ばれ、江戸時代後期に松坂城下に住む紀州藩士の吉井定五郎（1776～1859）によって作られたのが始まりと伝えられている（岡村1932）。

吉井定五郎は、前述の松平定朝（1773～1856、菖翁と号した。）と同年代の人物であり、菖翁が作出した多数の菖翁花やその原種となった系統が、当時の江戸（開花当初の淡い桃色が次第に薄くなる。）



て栽培されていたので、紀州藩士や松坂商人を介して入手することもできたと思われる。また菖翁は49才から13年間にわたって京都町奉行に出仕しており、任地の京都でも花菖蒲の栽培を行っていたと「花菖蒲培養録」に記されている。京都と伊勢・松阪は距離的にも近く、花菖蒲を介して菖翁と吉井定五郎との交流があつても不思議ではない。二人の出会いを示す文書は見付かっていないが、吉井定五郎は江戸花菖蒲の存在を知っていたであろうし、当時流行していた地元の花菖蒲も含めて収集栽培し実生親に利用していたであろうと容易に推測できる。

一方、伊勢神宮近くの斎宮（三重県明和町）には古来ノハナショウブが群生しており、寛政9年（1797年）の伊勢参宮名所図絵にも「20丁（約2km）にわたって咲く花あやめ有り、これをどんど花という」と記されている。地元では田植え時の花として“とんとん花”とも呼ばれていた。松阪と斎宮は隣接する市町村で、徒歩でも日帰りできる距離にある。

一説にはこのノハナショウブを改良して伊勢系花菖蒲が作られたとする言い伝えもある。吉井定五郎の時代には種々の花菖蒲品種が既に栽培されていたことから、当地のノハナショウブ（どんど花）から単独で伊勢系花菖蒲を改良育成した可能性は低いと思われる。しかしながら、後述するように伊勢系古花には固有の染色体変異が見られることから、交配の片親として“どんど花”が多少なりとも関与している可能性もある。

現在ではDNAの塩基配列から個体識別が可能になってきたので、花菖蒲においても分子遺伝学的な研究が進めば系統の類縁関係が今後明らかにされるであろうと期待している。

江戸時代後期に松坂でどのような花菖蒲が育種素材として用いられていたのか、記録が残されていないのは残念であるが、伊勢系古花の成立にとって最も重要なことは、実生世代の多数の個体の中から独自の美的価値観に基づいて垂れ咲きや柔軟な色彩の個体を「すばらしい花だ」と評価し選抜したことである。吉井定五郎は、美の枠組を厳守して、多数の実生個体から何を残し何を捨てるか、育種のツボと勘を心得た人物であったと推測される。

吉井定五郎が作出した百種以上の花菖蒲は、後継ぎの吉井吉之丞が遺産を守り、その後明治時代にかけて松阪の野口才吉、長林堅三郎、津の吉川万吉に受け継がれた。昭和に入ってからは、地元の宮川助一、広出泰助、岡村金藏、青木清次郎らによって、さらに多数の伊勢系古花品種が育成され保存してきた（田中 1996、1998）。

伊勢系古花の特徴

伊勢系古花に見られる具体的な特徴は次の通りである（富野 1954、田中 1997）。

- ①花は三英咲きで、3枚の大きな外花弁（外花被、外弁）が丸弁となって互いに重なり垂れ下がる（図1）。この花弁が垂下する様子が伊勢系の特色であり、品種によってなだらかに垂れる富士山型や弁元は丸味を帯び弁先が緩やかに垂れる地蔵肩型等がある。なかには花弁途中まで横に張る怒り肩型や平咲きなども見られるが、伊勢系では好まれないタイプとなる。また六英咲きや八重咲き（獅子咲き）などは異型花ないし異系として除外される。古花品種の中には、花弁の表面が縮緬地と呼ばれる縮れ皺（しわ）を呈するものがあり、絹織物に似る柔らかい風合いと雅趣を添える。
- ②内花弁（内花被、内弁）は3枚で柔らかく抱え立ちとなり、伊勢系では鉢（ほこ）と呼ばれる。花の中心で鉢が凜と立つ姿は、美しさを象徴的に表している。多くの古花では外花弁と内花弁が同色であるが、花色の濃淡や色違いの品種もある。
- ③花芯（雌蕊）は内花弁の周りに位置し、雌蕊の上端部分には鶴冠（とさか）状の不定形の切れ込みがあり、これを伊勢では「蜘蛛手」（くもで）と呼ぶ。蜘蛛手がよく出ている花は乱舞の花芸とも映る（図2）。
- ④肥後系の大輪花と比べれば、花のサイズは中輪で垂れ弁であることも反映して花が小さく見える。花色は全般的に淡い柔らか



図2. 蜘蛛手が大きな伊勢系新花・雪嵐

- な色調のものが多く、ほのかな桜色や薄いピンク系の花色は伊勢系の特徴的色彩である。
- ⑤葉は剣葉で立ち、花茎と葉はほぼ同じ高さになつてほど良い調和が取れている。このため花が高く抜き出ることは少ない。
- ⑥染色体数が1本多い異数体($2n=25$)の品種が古花には幾つもあり、江戸系や肥後系では見付かっていない。異数体の存在は伊勢系に特異的な遺伝的特徴である。
- ⑦草勢はそれほど旺盛ではなく、脇芽の数が少なく株分け増殖が限られる品種も多い。また、異数体のように花粉稔性や種子稔実率が低く、交配親として用いるのに不向きな品種もある。

遺伝学から見た花菖蒲の実生世代

花の構造はハナショウブを含むアヤメ属植物に共通する形態であり、雌蕊の裏側上部に柱頭があり、受粉と花粉発芽が起こる生殖機能に重要な役割を果たしている。雌蕊の下に雄しべの葯があり、花粉はここから放出される。この雌蕊と雄蕊の物理的な位置関係から、上部にある柱頭に同花花粉が受粉する機会は少なく、虫媒による他家受粉が起こり易い構造となっている。人為的に自家受粉をすれば自殖種子は採れるので、自家不和合性のような複雑な他殖性機構が関与している訳ではないが、ハナショウブの花の構造は、他家受粉を促進するユニークな他殖性システムのひとつである。

花菖蒲はどの品種や個体でも、複数の遺伝子座について見れば遺伝子組成がホモ型ではなくヘテロ型であるので、遺伝的には純系ではない。これは花菖蒲が他殖性植物であることに起因する。従って、花菖蒲の実生世代では種々の遺伝子型個体が分離して現れる。このことは、たとえ伊勢系品種の自家受粉から得た実生世代であっても、伊勢系以外の形質を持つ個体が出てくることを示唆している。

三英咲きの花菖蒲の花を自家受粉すると、その実生からは六英咲きの個体がしばしば出てくることが知られている。三英咲きが優性(A)で六英咲きが劣性(a)とすれば、メンデル遺伝の分離の法則から、三英咲きヘテロ(Aa)の自家受粉後代で六英咲き(aa)が $1/4$ の割

合で分離して現れると期待される。

富野耕治は、三英咲き伊勢系古花「乙女」(図1)の自殖実生から、六英半八重の獅子咲き新花「桜獅子」を作出した(本冊子の扉写真を参照)。ピンクの波打つ垂れ弁は新鮮さがあり、肥後系との交配実生から作られた獅子咲き品種「白獅子」や「若獅子」を加えて伊勢の三獅子と名付けた。作出者の富野自身が、「伊勢ハナショウブの正統からみれば、明らかに邪道であるがー」と述べているように(富野 1972, p. 22)、これらは、伊勢系古花の枠組みを超えた新花品種として位置付けられる。

伊勢系古花を特徴付ける幾つかの形質には、それぞれに対応する複数の異なる遺伝子が関与しているので、実生選抜においては伊勢系を特徴付ける最適な遺伝子組み合わせを持つ個体を選抜することが重要となる。言い換えれば、伊勢系花菖蒲は単一の遺伝子で決まるような単純な形質ではなく、伊勢系の子孫がすべて伊勢系になる訳ではない。

富野(1963)によって成されたハナショウブの異数体研究では、調査した伊勢系の94品種のうち22品種で異数体が認められ、伊勢系品種の約 $1/4$ を占めることが明らかにされた。一方江戸系71品種と肥後系73品種ではすべて正2倍体($2n=24$)で異数体は見出されていない。同定された異数体は大半が伊勢系古花であり、現在も18品種が残っている。異数体は、減数分裂における染色体の転座や欠失などの構造変化によって生じたことが、藪谷らの研究から明らかにされている(Yabuya et al. 1989, 1992)。

このような染色体変異を有する個体が優良な花容を示したことから、この地域の先人達は経験を頼りに積極的に異数体系統を増殖育成したものと思われる。異数体による特徴的な形態変化は種々の動植物で認められ近年になって細胞遺伝学的な解析も行われているが、異数体についてまだ何も知られていなかった時代に、ハナショウブでこのような特徴を持つ花に目が向けられたことは、意図的ではなかったとしても注目に値する。

伊勢・松阪の歴史風土と農村風景

古来、奈良・平安時代の頃、松阪から伊勢に及ぶ一帯は、伊勢湾に面する豊かな農漁村で麻や絹の機織りが栄え、伊勢神宮に納められる布地や装束が作られていた。安土桃山時代に蒲生氏郷(がもううじさと)が松坂城を築いた(1588年)頃には、伊勢平野で綿花の栽培が広まり、江戸時代初期には松阪木綿や伊勢木綿の大産地となった。

当時の松阪は、農業や商業が栄える豊かな土地柄であったことから、紀州徳川藩の飛び領地となり、松坂城は紀州藩士の居城となった。当時、伊勢平野は「見渡す限り綿畑」となり、「名月の花かと見えてわたばたけ」(芭蕉)と読まれた(田畠 1988)。綿花の栽培には多量の金肥を必要としたが、これを支えたのは伊勢湾の地引き網漁であり、それにより肥料として使われる干し鰯(ほしか、いわしの魚肥)の大量供給を可能にした。

江戸時代中期には、松坂商人が江戸の町に出店し、三井家創業の越後屋(後の三越)が繁盛し豪商となった。また江戸時代を通じて、各地から伊勢神宮に向かう「おかげ参り」が庶民の間で流行し、松坂や伊勢は多くのさまざまな人達と地方文化が行き交う宿場町として栄えた。

この時代に花菖蒲も含め種々の園芸植物が農家で栽培され、明和(1770年)～享和(1801年)には菊や花菖蒲が流行したと松坂の森壺仙(1743～1828)が「宝暦咄し」に記録している(田中 1996)。

また江戸時代には、伊勢湾に面して広がる伊勢平野は全国有数のお米の産地であった。幕末から明治にかけて三重県内の篤農家が作出した銘柄米の3品種(関取・竹成・伊勢錦)は「伊勢三穂」と呼ばれ、それぞれ「倒れにくい・収量が多い・酒米に最適」として全国に広まり、その後のイネの品種改良にも大きく貢献した。当時の伊勢平野は、全国的に見ても農業や園芸の先進地域であったことを物語っている。

江戸時代後期にできた松阪三珍花(伊勢三花)

松阪三珍花とは、江戸時代後期に紀州藩松坂で育成された古典園芸植物で、松阪撫子・松阪花菖蒲・松阪菊の3種の総称である。



図3. 伊勢三花(松阪三珍花)
左から 伊勢撫子、伊勢花菖蒲、伊勢菊

全国的には、伊勢撫子・伊勢花菖蒲・伊勢菊として知られており、これら伊勢三花は松阪三珍花と同じ品種群の別称である(図3)。松阪三珍花と呼ぶのは、松阪がこれら系統の発祥地であることから名付けられたものである。一方、伊勢菊や伊勢花菖蒲など伊勢を冠するのは、松阪周辺を包含するこの地域が奈良・平安の時代から伊勢の国と呼ばれてきたことに由来する。また伊勢三花は上述の伊勢三穂と呼応する名称である。

伊勢撫子は、1830～1840年頃(天保～弘化年間)に、松阪に住む紀州藩士・繼松栄治により作出されたと伝えられている(岡村 1931)。伊勢撫子は光格天皇に献上され、宮庭で栽培されたことから京都では「御所撫子」と呼ばれた(図4)。伊勢撫子の花は、5～6枚の花弁が15～20cmの長さに伸長し、肩張らず柔らかく縮れて垂れ下がる。原種のセキチクまたはカワラナデシコの遺伝変異から選抜育成されたと考えられている。



図4. 京都・宝鏡寺の伊勢撫子(御所撫子)

伊勢菊も、伊勢花菖蒲や伊勢撫子と同時代の江戸時代後期(1830年代)に松阪在住の木下藤八が実生から作出したのが最初とされる。中輪型品種(図3右)は、細長い花弁が揺れて垂れ下がる。花容は小～中型で、花色も変化に富む。細い花弁が立って咲く京都の嵯峨菊に由来し、嵯峨菊の系統から垂れ咲き変異が選ばれた

と言われている（岡村 1935）。大輪型品種は、花弁が針管または細管で、咲き始めは渦巻状から徐々にほぐれるように開花が進行し、花弁が垂れ下がる。花径が20cmほどに展開するので、通常は花に輪台を付けて観賞する（図5）。



図5. 伊勢菊(大輪型 美香)

垂れ下がる花を美とする伊勢の園芸文化

ナデシコ、ハナショウブ、キクの3種は、植物分類学的には全く異なる「科」に属する植物であるが、伊勢三花の園芸品種はいずれも共通して「花弁が垂れ下がって咲く」という特徴を有している。これは、かつての伊勢・松阪地域の人たちが“垂れ下がる花が美しい”とする想いがあり、好んでそれに適う個体を選抜し育成した成果であるに違いない。

枝垂れ梅や枝垂れ桜、あるいは藤の花のように「垂れて咲く」のを美しいとするのは、日本人にとって古来の美意識であり、十二单衣の美しい姫君を連想させるのである。しかし伊勢三花には、それほど華やかで華麗な姿は見られず、むしろ控えめである。

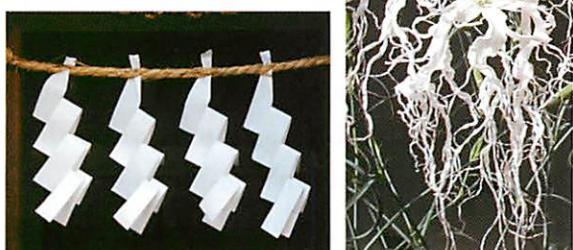


図6. (1)和紙で作られる紙垂（しで）
(2)白花の伊勢撫子

神社や祭壇でよく見かける紙垂（しで）は、和紙に切れ目を入れて細長く折り、注連縄（しめなわ）などに付けて垂らした紙である（図6-1）。この紙垂は、邪気を払いその場を清め

るために飾られたり、五穀豊穣を祈るために使われる。伊勢地域では、正月に飾られる注連縄はその年の年末まで1年を通して玄関に飾るという風習が今も残っている。

清水（2015）が「花の改良には“見立て”的美意識が働いており、日本では古神道の感性が息づいている」と述べているように、白花の伊勢撫子（図6-2）は、まさに紙垂を連想させる“見立て”であろうと思われる。伊勢三花には紙垂に象徴される日本古来の自然崇拜と祈りの感性が反映されており、伊勢地域ではこのように清楚な美意識が、撫子のみならず菊や花菖蒲などの園芸文化にも根付いてきたと考えられる。

伊勢系古花の栽培と保存

現存する古花品種は、三重県中勢部の花菖蒲愛好家や同好会（松阪三珍花保存会、伊勢神宮国華会、三重花菖蒲協会等）の会員達によって栽培保存されている。

毎年6月中旬には、松阪城跡に隣接する公民館で三珍花保存会による花菖蒲展示会が催され、伊勢系古花を中心に100鉢以上が展示される。また、伊勢神宮の内宮参道に設けられる屋形展示棟には、国華会の会員による花菖蒲が200鉢近く展示され（図7）、その中で少数ではあるが伊勢系古花も見ることができる。また外宮の勾玉池には主に江戸系や肥後系の新花が植栽され、栽培管理が行き届いた花菖蒲園となっている。この勾玉池では伊勢系花菖蒲が少ないので、全国から訪れる花菖蒲愛好家の為にも今後もう少し伊勢系品種が増えることを期待している。



図7. 伊勢神宮における国華会の花菖蒲展示

伊勢系に限らず古花品種はそれぞれ固有の形質を持っているので、貴重な遺伝資源として長年にわたり継続的に栽培保存することが求められる。過去100年以上に及ぶ伊勢系古花の栽培保存においては、この地域の熱心な愛好家の存在が大きな役割を果たしてきた。今後はより広い地域で栽培され、伊勢系花菖蒲の愛好家が一層増えることを期待している。

伊勢系古花の品種検定と解説

私は10年以上にわたって松阪三珍花保存会に所属し、伊勢系古花品種の収集と栽培を続けて来た。現在は自宅で、伊勢系古花の55品種に伊勢系新花や江戸系・肥後系品種を加えて計約130品種を鉢栽培している。

私の栽培経験では、会員の間で栽培している品種の中にラベル間違いがあったり、長年月の間にどれが元品種なのか分からなくなったり、「御代の春A」とか「御代の春B」のように符号を付けて区別せざるを得ないことも起こる。このため品種検定は、毎年開花時の短期間に行うべき重要な仕事のひとつとなっている。

伊勢系古花については詳細な品種解説（田中2000）があり、品種同定には大いに役立っている。また自宅栽培の花菖蒲を撮影した各品種の写真も揃ってきた。ここでは伊勢系古花のうち36品種について、次ページ以下に写真と共に田中（2000）の品種解説を引用改編し掲載した。今後の品種検定に役立てば幸である。残りの古花品種については、別の機会に紹介したい。

引用文献

- 石阪晋作（1973）松平菖翁伝. ガーデンライフ 12(7) : 39-42.
岡村金藏（1931）伊勢撫子に就て. 実際園芸 11(8) : 658-664.
岡村金藏（1932）伊勢花菖蒲に就て. 実際園芸 13(5) : 337-345.
岡村金藏（1935）伊勢菊の品種と栽培. 実際園芸 19(6) : 281-292.
加茂元照（1992）「花菖蒲培養録」現代語訳.
花菖蒲（日本花菖蒲協会報）22 : 12-20
清水 弘（2015）続あやめ漫談「見立て」.
花菖蒲（日本花菖蒲協会報）43 : 40-41

- 田中信一（1996）伊勢ハナショウブの歴史.
花菖蒲（日本花菖蒲協会報）24 : 12-18
田中信一（1997）伊勢ハナショウブの特徴.
花菖蒲（日本花菖蒲協会報）25 : 24-29
田中信一（1998）伊勢玉蝉花名鑑. 花菖蒲（日本花菖蒲協会報）26 : 24-29
田中信一（2000）伊勢ハナショウブの古花.
花菖蒲（日本花菖蒲協会報）28 : 27-36
田畠美穂（1988）松阪もめん覚え書き. 中日新聞社発行、PP.1-214
富野耕治（1954）伊勢花菖蒲に関する調査報告.
三重大学学芸学部研究紀要11 : 13-23
富野耕治（1957）伊勢ハナショウブ. 新花卉 14 : 9-12.
富野耕治（1963）本邦産アヤメ属植物とくにハナショウブに関する育種学的基礎研究.
三重大学学芸学部研究紀要 28 : 1-59
富野耕治（1967）日本の花シリーズ「花菖蒲」泰文館発行 pp. 1-246.
富野耕治（1972）伊勢ハナショウブ. ガーデンライフ 11(6) : 19-25.
西田一声（1955）熊本花菖蒲の品種と栽培.
花菖蒲（日本花菖蒲協会報）1 : 10-14
平尾秀一（1973）江戸ハナショウブの特徴.
ガーデンライフ 12(7) : 43-45.
松平定朝（1853）花菖蒲培養録（嘉永六年本）.
雑花園文庫所蔵（名古屋）
村山 豪（1974）武士の園芸 肥後花菖蒲文化史.
ガーデンライフ 13(6) : 31-33.
Yabuya T., Kikugawa H. and Adachi T. (1989)
Karyotypes and chromosome association in aneuploid varieties of Japanese garden iris,
Iris ensata Thunb. Euphytica 42 : 117-125.
Yabuya T., Kikugawa H., Aiko I. and Adachi T. (1992) Cytological studies of hybrids between aneuploid and eu-diploid Japanese garden iris (*Iris ensata* Thunb.) Cytologia 57 : 253-257.
-
- 神山康夫（日本花菖蒲協会会員、三重花菖蒲協会会員、国華会会員、三重大学名誉教授）

伊勢系花菖蒲・古花品種の写真と説明

文中、弁とは外花被（外弁）を、鉾とは内花被（内弁）を、芯とは花芯（雌蕊）を、それぞれ指す。写真は神山康夫・撮影、説明文は田中（2000）から引用改編。

明石 あかし

作出年代：1931年以前



白色の花で、弁の周辺に青紫が少しかかる。基部から薄い青紫色の脈が走る。縮緬地の弁質で周縁部が波状になる。鉾は白地で弁よりもやや濃い青紫色が加わる。芯も弁と同色の青紫色で、蜘蛛手が少し見られる。

十六夜 いざよい

作出年代：1940年以前



淡い紅紫色の無地で、濃色の脈が粗く入る。弁はよく縮み、波状になっておおらかに垂れる。鉾は弁よりやや色薄く、基部から先端まで同色である。芯も弁と同じ位の色の濃さで、蜘蛛手がある。草丈は高く、葉は剣状になる。早咲きの品種である。

伊勢誉 いせのほまれ

作出年代：1940年以前



青味を帯びた藤紫地に不定形な白筋が幾条も走る大輪花。弁は肉厚の縮緬地で、著しく変形して垂れる。鉾は大型で直立し白地に紫色の覆輪ばかりし、芯も白色で先端が紫味を帯びる。異様な咲きぶりで松阪司に近似するが、松阪司は赤味がかった濃紫色である点が異なる。草丈は中で、弱勢。 $2n=25$ の異数体。

旭丸 あさひまる

作出年代：1904年以前



赤味がかった濃紫色の花で、縮緬状の弁は波を打ち、互いによく重なり合って垂れる。弁中央の基部から白い脈が数本走る。鉾の基部が白く筋が放射状に先端に向かって走る。芯も白色で、先端は弁と同色の覆輪がある。細葉で垂れ、草丈は中程度で早咲きである。

伊勢海 いせのうみ

作出年代：1920年以前



藤紫地に濃い藤紫の絞りと白色の脈が走る。弁は大きく重なり、弁質は縮緬状で、周縁は波状の襞がある。鉾は弁よりやや濃色の絞り。芯の内側は白色で、その周縁と先端が弁と同色、蜘蛛手がよく出る。葉は幅広く剣葉である。伊勢系品種の特徴を具えた良花である。

落葉衣 おちばごろも

作出年代：1907年以前



白地に青紫色の薄い絹の入る爽やかな色彩で、周縁は白色。縮緬状の弁は大きくよく垂れる。鉾は弁と同色で立ち、濃い青紫色の糸覆輪がアクセントになっている。芯も白地にごく薄い青紫色が少し混じり、蜘蛛手が見える。草丈は中で、葉は細く強直性である。 $2n=25$ の異数体。

伊勢系花菖蒲・古花品種の写真と説明

文中、弁とは外花被（外弁）を、鉾とは内花被（内弁）を、芯とは花芯（雌蕊）を、それぞれ指す。写真は神山康夫・撮影、説明文は田中（2000）から引用改編。

乙女 おとめ

作出年代：1904年以前



開花初期は淡い桃色で、満開を過ぎると一様に薄くなる。縮緬状の弁は大型でよく重なり、肩を落として垂れる。鉾は弁と同色で小さく斜立し、芯も弁と同色で小さく、蜘蛛手が少し見られる。柔らかなピンク花色が好まれ、種々の交配親として使われてきた。

神路の雪 かみじのゆき

作出年代：1940年以前



純白で厚手の大きな弁。全体に縮緬状で周縁が波状に縮れてよく垂れる。鉾と芯も純白で直立し、蜘蛛手が明瞭に出る。草丈はやや低く、葉と花の高さはほぼ同じ。葉は剣状で幅広い。弱勢で繁殖力は低い。開花期はやや晩生。風格の高い花で、古花の名品のひとつ。

京舞子 きょうまいこ

作出年代：1904年以前



薄い紅紫の砂子絞りで、細かい同色の脈が入る。縮緬地の弁は重なり、ゆったりと垂れる。鉾は濃い紅紫が目立ち、白い糸覆輪が入る。芯は白く、周縁はごく薄い紅紫の砂子絞り。淡色の弁と濃い芯とが対照的な2色花。葉は少し垂れ、草勢は強い。染色体数が $2n=25$ の異数体。

桂男 かつらお

作出年代：1930年以前



純白で縮緬状の大きな弁を持ち、先の方が波状になり、互いによく重なる。柔らかみのある咲き方をする。鉾は斜出し、芯には大きな蜘蛛手が見られる。草丈は高く大輪の良花だが、花茎が細くややアンバランス。株分けや植替えの時、弱い苗しか取れず増殖率が低い。

狩衣 かりぎぬ

作出年代：1930年以前



薄い藤色の花で、同じ色のやや濃い細脈が一面に入る。弁は大きくて縮みが見られ、互いに重なり良く垂れる。鉾は小さく、弁と同色で直立する。芯は中央部が白色で先端が花弁と同色。やや浅い蜘蛛手が見られる。

銀沙灘 ぎんしゃだん

作出年代：1940年以前



白地に薄青色のぼかしが僅かに入る。弁は縮緬状で周縁は波状の襞があり、重なってゆったりと垂れる。鉾は白色で青紫の糸覆輪が入り直立する。芯は白色で、明瞭な蜘蛛手が見られる。草丈は中。剣葉で、草勢は弱く、繁殖力は劣る。上品で奥ゆかしい花である。

伊勢系花菖蒲・古花品種の写真と説明

文中、弁とは外花被（外弁）を、鉾とは内花被（内弁）を、芯とは花芯（雌蕊）を、それぞれ指す。写真は神山康夫・撮影、説明文は田中（2000）から引用改編。

月宮殿 げききゅうでん

作出年代：1940年以前



白地に薄青のほかしが入る。縮緬状の弁はよく重なり、地蔵肩に垂れる。鉾は白地に藤紫色の糸覆輪が映え、美しく直立する。芯は白地に薄青のほかしが入る。弁の周縁にあまり襞はなく、丸味のある花形で気品が感じられる。 染色体数が $2n=25$ の異数体。

残月 ざんげつ

作出年代：1932年頃



雪白色に薄紅色がかすかに掛かり、薄紅の脈がかすかに走る。弁は大きくよく縮み、隙間がなく互いに重なる。周縁は大きな波や襞があり、よく垂れる。鉾は弁と同じでよく引き締まる。芯も弁と同色で、蜘蛛手が美しい。密標の黄色がアクセントになっている。 $2n=25$ の異数体。

白雲 しらくも

作出年代：1920年以前



純白色の中輪花。弁は幅に対して長く、周縁の波状の襞も少ないので、あまり垂れ下がらない。鉾は弁と同色の純白色の小型の立ち鉾。芯も同色で蜘蛛手が顕著である。草丈は高く、葉は幅広で、草勢は強い方である。

桜狩 さくらがり

作出年代：1930年以前



桜色の弁に白絞りが少し入り、弁の周縁に白い覆輪が入る。縮緬状の弁質を持ち、よく重なり垂れる。鉾は弁と同色だがやや薄色、芯は弁と同色で蜘蛛手が美しい。桜の満開を思わせる日本人好みの桜色の花である。草丈は中、葉は剣状の立葉で、繁殖は良く、作りやすい。

衆指の誓 しゅうしのほまれ

作出年代：1904年以前



白地に赤味を帯びた紫の砂子絞りで同色の筋が入る。鉾はやや小型で濃い赤紫色に白の糸覆輪が入り、同色の脈が入る。芯は薄色で周縁のみ淡藤色がかかる。蜘蛛手は小さい。色彩の濃淡が映える花。葉はやや幅広の剣葉で長く、草勢は強く作りやすい。

不知火 しらぬい

作出年代：1904年以前



渋味を感じる紫色を帯びた濃い桃色で、同色のやや濃い筋が入り、密標からほのかな白筋が走る。弁はよく縮み、周縁が波状で、隙間がなく互いによく重なる。鉾は弁と同色で大きく斜出し、芯も同色で蜘蛛手は小さい。開花は6月上旬。 同名異種が江戸系や熊本系にある。

伊勢系花菖蒲・古花品種の写真と説明

文中、弁とは外花被（外弁）を、鉾とは内花被（内弁）を、芯とは花芯（雌蕊）を、それぞれ指す。写真は神山康夫・撮影、説明文は田中（2000）から引用改編。

真如の月 しんにょつき

作出年代：1904年以前



混じりけのない青紫色で色が濃い。弁は厚手で大きく縮み、互いによく重なる。鉾は小型の斜め立ちで弁と同色。芯は中央から底に向かって白く、良く目立つ。大型の良い花だが、側蕾が出るのが欠点。6月初旬に開花する早咲き。草丈は中、葉は少し垂れぎみである。

瑞兆 ずいちょう

作出年代：1936年頃



薄紫地に白絞りが入り、濃紫の筋が入る。弁の周縁にうっすらと白覆輪が入る。鉾は濃く渋い赤味を帯びた紫色に濃色の脈が入り、周縁には白の覆輪。芯は白味で、周縁のみ薄く紫かかる。良花だが側枝が出る。草丈は中、草勢はやや弱い。

瑞宝 すいほう

作出年代：1940年以前



薄紫地に濃紫の脈が走り、周縁に向かって放射状に白絞りが入り弁の先端はやや白い。弁は大きくよく重なる。鉾は大型で直立し、弁よりやや紅色を帯び、濃色の脈が入りぼかしの白覆輪が見える。芯も鉾と同色だがより色が濃く、先端が白くて浅い蜘蛛手が見られる。

涼風 すずかぜ

作出年代：1910年以前



ごく淡い鼠青色で、縮緬状の大型の弁は、互いによく重なる。鉾は弁と同色の淡い鼠青色でさすかに白覆輪が入り、斜めの立ち鉾で引き締まる。芯も同色で、蜘蛛手は粗く大きい。伊勢系古花の名品のひとつである。染色体数が $2n=25$ の異数体。

涼波 すずなみ

作出年代：1920年以前



白地に淡い藤色がかかる大輪で、同色の少し濃い筋が見られる。弁はよく縮み、周縁が波状になる。鉾はやや大きく斜立し、弁と同色で濃色の筋が入る。芯も弁と同色で、先端はやや濃い。蜘蛛手が明瞭に出る。葉幅は狭く直立する。

龍巻 たつまき

作出年代：1940年以前



濃い青紫色。花弁は縮緬がよく発達し、花全体が巻き上がるようにならぶ。弁の基部から同色の濃く太い脈が走る。鉾も同色でやや大きく、芯も同色で蜘蛛手が粗く大きい。草勢は弱く栽培が難しい。染色体数が $2n=25$ の異数体。

伊勢系花菖蒲・古花品種の写真と説明

文中、弁とは外花被（外弁）を、鉾とは内花被（内弁）を、芯とは花芯（雌蕊）を、それぞれ指す。写真は神山康夫・撮影、説明文は田中（2000）から引用改編。

夏姿 なつすがた

作出年代：1940年以前



淡い藤紫色に弁元白く抜け、白絞りがぼかしで入る。縮緬状の弁質を持ち、よく重なっておおらかに垂れる。鉾は弁と同色で直立し、目立たぬ細脈がある。芯も弁と同色で周縁にぼかし、蜘蛛手が顕著。鉾と芯は小型で直立。伊勢系古花の名品のひとつ。 $2n=25$ の異数体。

羽衣の舞 はごろものまい

作出年代：1920年以前



濃い赤味のある紫色の大輪花。弁はよく縮み、弁質柔らかく振れることがある。鉾は直立し、基部は白色で周囲は弁と同色。芯も白色で先端は弁と同色。蜘蛛手は粗く大きい。鉾、芯とも小型なため、花が大きく見える。葉は幅の広い濃緑色の剣葉。6月初旬に開花。

藤波 ふじなみ

作出年代：1904年以前



赤味の少ない明るい紫色に同色の薄い脈が走り、弁元の蜜標が目立つ。縮緬地で襞の多い弁は互いによく重なり大きく垂れる。鉾は弁と同色の小型の立鉾。芯も弁と同色だが中心部は白く、蜘蛛手がある。草丈は中程度。5月下旬～6月初旬に開花し、早咲き品種。

浪花津 なにわづ

作出年代：1940年以前



明るいピンク地に、藤紅色の脈が入る。弁は縮緬状で、周縁にゆるやかな波状の襞があり、地蔵肩の垂れ咲きとなる。鉾は直立し弁と同色。芯も弁と同色で粗い蜘蛛手が見られる。花付きもよく丈夫な品種で作りやすい。

花の司 はなのつかさ

作出年代：1940年以前



明るい桃色の中輪花で、弁の周辺は色が薄く、弁元から薄い紅紫の細い筋が入る。弁はよく縮み、周縁は波状の襞がある。鉾は弁と同色でやや大きく斜立する。芯も弁と同色で、蜘蛛手はあまり出ない。葉は剣葉で、草丈は他品種と比べてやや低い。

藤袴 ふじばかま

作出年代：1930年以前



藤紫色の無地に、同色のやや濃い脈が入る。弁は柔らかい感じの縮緬地の薄弁で、周縁が波状になり重なって垂れる。鉾は弁より色薄く、やや大きく斜立し倒れやすい。芯も弁と同色で、蜘蛛手が見られる。葉は細くやや垂れ葉で、6月初旬には咲き出す早咲き品種。

伊勢系花菖蒲・古花品種の写真と説明

文中、弁とは外花被（外弁）を、鉾とは内花被（内弁）を、芯とは花芯（雌蕊）を、それぞれ指す。写真は神山康夫・撮影、説明文は田中（2000）から引用改編。

紅孔雀 べにくじやく

作出年代：1940年以前



濃い紅紫に同色の筋が入る大輪花。弁の色が濃いので蜜標が目立つ。弁は縮緬が発達し、怒り肩でよく垂れる。鉾は弁と同色でやや淡く、白い脈が走る。芯も同色で、蜘蛛手が少々見られる。草丈は中で、葉は剣葉。草勢は強く花茎がよく伸びる。5月下旬に開花する早咲き。

宝玉 ほうぎょく

作出年代：1940年以前



くすんだ藤色（鳩羽色）に、やや濃色の細脈が弁元より放射状に走り、弁周縁は白の覆輪となる。弁はよく縮み大型で垂れる。鉾は立ち、少し桃色掛かりのくすんだ藤色で、同色の濃い脈が入る。芯は鉾と同色でやや濃い目。浅い蜘蛛手が見られる。花茎と葉とのバランスが良い。

蓬萊山 ほうらいさん

作出年代：1940年以前



青味がかった濃い紫地に白の小絞りが密に入る。一つ一つの花毎に絞り具合が微妙に異なり、時には色のごく薄い花もある。弁は大型でよく垂れる。鉾と芯は立ち性で、先端はともに弁と同色。蜘蛛手は粗く大きい。葉は剣状で硬直、草勢は強健。 染色体数 $2n=25$ の異数体。

松阪司 まつさかつかさ

作出年代：1940年以前



赤味がかる濃い紫色に不定形な白筋が途切れながら幾条も走る大輪花。弁は肉厚で縮緬がよく発達し、弁がごつごつとして垂れる。鉾は大型で直立し、白地に紅紫色の覆輪ぼかし。芯も白色で先端が紅紫色を帯びる。異様な咲きぶりは伊勢誉に近似。 染色体数 $2n=25$ の異数体。

紫式部 むらさきしきぶ

作出年代：1904年以前



薄紫の花で弁はビロード地でよく縮み、同色で少し濃色の脈が走る。鉾は弁と同色で斜出する。芯も同色で基部はやや薄く、蜘蛛手は少ない。草丈は低く、剣葉。花茎と葉は同じ高さで、花と葉のバランスが良い。弁、鉾、芯とも同色でまとまった感じの花容である。

桃の里 もものさと

作出年代：1940年以前



澄んだやや濃い桃色の花で、同色のより濃い脈が入る。弁は富士山型に垂れる。鉾は弁と同色で、小さく斜出する。芯も弁と同色で、蜘蛛手は粗い。葉は剣葉で、葉と花茎の高さは同程度で、草姿のバランスがとれている。 染色体数 $2n=25$ の異数体。